奈良県立大学「研究季報」第12巻 第2号（2001年10月10日）

英語化した日本語の発音

石原田　正廣

はじめに

伊藤孝治先生の『海のかなたの日本語　英米辞書に見る』（大阪教育図書、2001）は画期的な業績となった。収録語数は893とある。それほど多くの日本語が戦前と戦後を通じて英米の辞書に採用されていることを先生は発見なさった。類書や先行研究も紹介されているが、少なくとも調査した語彙や英語辞典の数に関する限り、先生のご著書はそれらをはるかに凌いでいる。未収録の固有名詞や商標名なども含めると、さらに膨大になっていたであろう。この本の魅力は尽きないが、特にその第Ⅴ章は英語化した日本語一覧になっていて、異形を含む988語を見出し語としてその発音、語義、初出年、関連語などが簡明に記されている。また、巻末には和英索引662項目と英和索引243項目が簡便な辞書としても利用できるよう用意されている。これで一目瞭然、どんな日本語が英語に採用されているのか、英語での初例はいつか、英語国民はどう理解して用いているのか等々、容易に知ることができる。そして、私たちは英語に採用された日本語がかくも多様であることを知って驚くのである。実は、筆者も同書の校閲などに多少関与することになり、そのお陰で特に発音と形態に関して多大な刺激と恩恵を受けることができた。ここに謝意を表し、これを典拠として以下に標題につき考察するが、その全てについて論じる余裕はない。英語化した日本語に見られる母音と子音の特徴的な傾向に限って記述したいと思う。なお、強勢の位置や発音記号に若干の変更を加えたことを断っておく。本稿の音声表記は主に J. C. Wells, *Longman Pronunciation Dictionary* (Essex, 1990, New Editon 2000) に依拠し、併せて Peter Roach & James Hartman eds., *Daniel Jones's English Pronouncing Dictionary*[15] (Cambridge, 1997) を参照した。

Ⅰ. 日本語と英語の音韻体系

1. 高低アクセントと強弱アクセント

日本語が英語に採用されると、それは日本語の音韻体系を離れ、英語の音韻法則に従う。英語と日本語は音韻体系が異なり、日本語は開音節言語に属し、英語は閉音節言語に属す。日本語には特殊拍の撥音や促音で終わる音節もあるが、約9割の音節が母音で終わる。否定の意を表わす撥音の「ん」も本来「ぬ」[nɯ] であったのが、その第2要素の母音が無声化して脱落し、[n] で終わるようになったものである。一方、英語には母音で終わる開音節も約4割あるが、子音で終わる音節の方が多いので閉音節言語と呼ばれる。一般に、古い時期に英語化した語ほど英語によく馴化していて、それらを見ると日本語の音声がうまく英語化していく様がよく分かる。例えば「坊主」bonze [bɔnz], 「梅干し」me(e)bos [mi:bɔs], 「将軍」shogun [ʃóugʌn, -gən], 「脇差」wacadash [wǽkədæʃ] などは綴字も発音も立派な英語である。同様に、英語に採用された時代こそ新しいものの、「家(うち)」hoo(t)ch [hu:tʃ], 「娘」moose [mu:s], 「少し」skosh [skouʃ], 「掃除」soogee [sú:dʒi:] などもまた、その綴字や発音から理解されるように、英語によく馴染んでいるので、これらはにわかに英語化したと推量することができる。

日本語は高低アクセント（pitch accent）であり、英語は強弱アクセント（stress accent）である。

この違いはさまざまな特徴となって現れる。英語化した日本語の中には、まれに日本語のアクセントの位置を変えずに強弱アクセントに置き換える語もある（II.2.(2), IV.1.(4) 参照)。しかし、通常は英語の慣用に従うもので、例えば「笄」と「公害」では日本語のアクセントは同じ［ko˥ogai］であるが、英語化すると前者は［kougái］, 後者は［kóugai］と発音され、区別される。強勢の位置が異なるのは英語に採用された時代の違いを反映しているのであろう。前者は古く、後者は新しく英語に採用された日本語である。これとは逆に、日本語で異なる語が英語化すると同綴字同音異義語となるものもある。例えば、「泥鰌」と「道場」は日本語ではそれぞれ［do˥dʒou］と［do˥odʒou］として長短およびアクセントの違いで区別されるが、「ど、どう、どお」は英語化すると等しく＜do＞と綴られるので、両者は綴字も発音も同じ dojo［dóudʒou］になる。英語では do-jo と音節区分され、原則に従ってまず第1音節に強勢が置かれる。次に、開音節で強勢ある母音は長音化する傾向があるので、「泥鰌」の［do-］は英語では長音の［dóu-］になった。因みに、これらはほぼ同時期に英語に採用され、「泥鰌」の初例は1911年、「道場」の初例は1915年である。

2．日英語間での音質の異同

英語には日本語に存在しない母音や子音が多く存在する。日本語の母音は基本的に「あいうえお」の5音に限られ、［a, i, u, e, o］と表記されるが、英語の母音は12個、あるいはそれ以上が確認されている。日本語には［æ, ɑ, ʌ, ə］など普通は存在しないので、「あ」［a］でそれらに対応する。換言すれば、日本語の母音はその受け持ち範囲が英語よりもはるかに広いということになる。従って、例えば英語の［æ, ɑ, ʌ, ə］などを同一の「あ」［a］として聞き取ってしまい、「い」［i］以下も同様にして、実際には異なる複数の音をつい同一視しがちである。子音の場合も同様である。一般に日本語の子音体系は14の音素からなるとされるが、それより多めに見ても［k, g, s, z, ʃ, tʃ, dʒ, p, b, t, d, h, ç, F, m, n, R, j, w］の19音に限られる。英語では少なくとも24の子音があり、そのうち例えば［f, v, θ, ð］などは日本語に存在しないので、英語の［f, r, θ, ð］を［F, R, s, z］と交替させねばならない。しかも、日本語では撥音や促音、および拗音を除けば、子音を連続させてはならないし、ア行と「ん」以外は必ず＜子音＋母音＞という結合でなければならない、という制約がある。英語にはそのような制限や規則はなく、様々な音連続や音結合が可能である。

注意したいのは、日本語と英語の発音に関する違いは単に音素や音声の数に留まらず、音質においても異なるという点である。両言語で共通して用いる発音記号は必ずしも同一音を意味しない。［f］と［F］, ［r］と［R］の違いと同程度に母音も異なる。例えば、日本語の「あ」は［a］と表記されるが、これは英語の前舌の［a］と同一ではなく、それより後寄りで、むしろ英語の［a］と 後舌の［ɑ］の中間に位置する。英語の［i］は日本語の「い」と「え」の中間に位置するので、日本語の［i］の方が英語の［i］よりも舌の位置は高く緊張している。英語の［i］が「え」に聞こえたりするのはこのためである。英語の［u］は半閉・後舌・円唇母音であるが、日本語の「う」は唇を丸めないので正確には［ɯ］と表記される。日本語の「え」は［e］と表記されるが、これは英語の［e］よりも口の開きを大きくするので、英語の［e］と［ɛ］の中間に位置する。日本語の「お」［o］は、ほぼ英語の［o］と等しいが、この音は英語では単独で出現しないので、「お」が英語化すると［ɔ, ɔː, ou］などとして現出する。子音の場合、［p, b, t, d］などの破裂音や［s, z, ʃ, ʒ］などの摩擦音は総じて英語の方が勢いが強い。例えば、英語の［ʃ］は日本語の「し」にも現れるが、日本語の［ʃ］の調音点は英語の［s］と［ʃ］の中間に位置する。英語の半母音［w］は両唇を丸めるが、日本語の「わ、を」における［w］は今日では円唇音ではない。その他、英語と日本語は共通の発音記号を用いる場合でも、実際の音声は個々において異なると考えた方

がよい。

3．モーラと音節

日本語の連母音と英語の二重母音は根本的に異なる。例えば「愛」と eye は同じ発音記号の［ai］を充てるが、日本語の場合2モーラの連母音であるのに対して、英語では1音節の二重母音である。日本語では、［a］と［i］に与えられる時間も強さもほぼ等しいが、英語の二重母音は下降調の移動母音であり、第1要素は強く明瞭に発音されるので純然たる母音に変わりないが、第二要素はわたり音的な特徴を持った半母音であり、付随的で弱く不明瞭に発音されるので、独立した母音の機能を十分に果たしていない。「塀」と hay,「塔」と toe,「能」と no などの発音の異同も同様である。その違いを分かり易く表記すれば、日本語の「愛、塀、塔、能」は［a.i, he.i, to.ɯ, no.ɯ］（ピリオドは音節の切れ目）となるであろう。一方、英語の eye, hay, toe, no は本稿では以下において［ai, hei, tou, nou］と表記するが、厳密には［áj, héj, tów, nów］である。

英語化するということは、なによりもまず英語の音韻体系に従うということである。完全に英語に馴化せずに外来語の段階に留まっている場合も同様である。日本語が英語に採用されると、既述の通り、例えば「あ」［a］がそのまま英語でも実現されることは極めてまれなことで、強勢があれば通常は［æ, ɑ:］となり、強勢がなければ［ə］となる。また、日本語のリズムで基本単位となる「モーラ」から見れば、各モーラに与えられる時間は等しく、特殊拍の引音「ー」も撥音「ん」や促音「っ」も同じ1拍分の時間が与えられるので、例えば「湿気」と「躾」、「熱気」と「寝付き」など、いずれも3モーラで時間的には対等である。しかし、英語のリズムで基本単位となるのは強勢を持つ音節が中心となるので、日本語の「温泉」は4音節相当の4モーラで［on˩sen］と発音されるが、英語化すると onsen［ɔ́nsen］と2音節に発音され、アクセントの位置も移動する。同様に、和製英語の「ホームステイ」6モーラは［ho˩omu-su˩tei］と発音されるが、英語化すると homestay［hóumstei］という2音節の発音になる。日本語は和製英語も含めて英語に採用されると英語の音韻法則に従うので、「樒」shikimi が学術用語で skim-mia になり、「少し」が skosh になり、「助平」sukebe(i) が skibby になるのも、英語の中で自然な変化の過程を経た結果である。仮に［ʃiki-, suko-, suke-］のままだと、なんとも不自然で英語らしくない。英語化した日本語はこのようにして、一般的には強弱・高低・長短・音質という4つの音声的特性の全てにおいて変容しなければならないのである。

Ⅱ．強　勢

東京では「雨」と「飴」などは高低と低高で区別する。方言によってはそのアクセントが逆転するところもある。いずれにせよ、日本語はことさら強弱の区別をせず、主に声の高低で識別するので、音声的特性としての弱音節は存在しない。3種の特殊拍も自立拍と同じ1モーラ分の長さが与えられ、自立拍も特殊拍も普通は明瞭に発音される。ところが、英語の強勢は本来的にゲルマン語の音韻法則に従うので、接頭辞を除いて語幹の第1音節に強勢を置くのが原則である。このような強弱アクセントでは一般に多音節語の場合、無強勢を含めて最大第4強勢まで認められる（第4強勢は無強勢を意味する）。第3強勢までの母音は強勢の度合いこそ異なるものの、普通は弱化されずに実現される。しかし、無強勢の母音は音質に関わりなく、通常［ə, i］で表わされる曖昧母音に変化したり、さらに弱化すれば消滅したりする。英語化した日本語はそのような変化を受ける。例えば、「大阪」［o˩osaka］は英語化すると Osaka と表記される3音節語になる。音節区分すると O-sa-ka となり、全ての母音は開音節に位置する。3音節語の強勢は語頭か語中に置かれ、語頭だと［óusəkə, ɔ́:-］となり、それに続く音節は弱化する。語中に強

勢が置かれると、語頭は第2または第3強勢が与えられた場合に［ou-］を保つが、通常は無強勢で短く曖昧に発音され、［əsá:kə］となる。このように、英語では一般に強勢ある音節は長めに、あるいは明瞭に発音され、強勢のない音節は短く、あるいは曖昧に発音される。英語化した日本語にどのような強勢が置かれるのかを知ることによって、英語への定着度を推測することができよう。外来語に留まっている限り、日本語はロマンス系の語彙と同じ扱いを受ける。詳しくは後述するが（II.4.)、要するに2音節語では強弱、3音節語では弱強弱になる。4音節語では強弱強弱となり、主強勢は最後から2番目の音節に置かれる。これが外来語に適用される英語アクセントの規則である。その外来語が英語に馴化すると、当然ゲルマン語のアクセントが付与され、接頭辞を除く語幹の初めに強勢が置かれることになる。

1．1音節語

日本語で1モーラから3モーラまでの語が英語で1音節語になるが、1モーラ語は必ず英語でも開音節になるので母音は長音化する傾向がある(e.g. bu［bu(:)］分, go(h), Go(h)［gou］碁, ri［ri(:)］里)。英語化して1音節語になる2モーラの日本語は連母音であるか（e.g. cho 町, koi 鯉, mai 舞)、尾子音に撥音を持つか(e.g. Bon 盆, dan 段, rin 厘)、そのいずれかである。前者の場合、英語では二重母音になるので、母音はそれ以上長くならない。後者の場合、尾子音に［n］を持つ閉音節になるので、そこでは一般に母音は短い。3モーラで1音節語となるのは母音脱落を生じた語（e.g. bonze 坊主, skosh 少し, soy 醤油）に限られる。

2．2音節語

2モーラから6モーラ（5～6モーラは和製英語）までの日本語が英語で2音節語になる。これら2音節語においては原則として第1音節に強勢がある。2モーラ2音節（e.g. baka 馬鹿, biwa 琵琶, fugu 河豚）の場合、英語でも必ず母音で終わるので第1音節は開音節になり、その母音は長音化して長母音または二重母音になる傾向がある。3モーラ2音節語の中には撥音や促音で終わる閉音節もある。閉音節では母音は原則として短音である。この原則は4モーラ以上の語にも適用される。2音節語で第2音節に強勢がある場合、いずれも日本語の低高というアクセントを反映している。これに属す語は一般に比較的早い時期に英語化したものが多いが、中には近年に導入されたものもある

(1) 第1音節に強勢: e.g. baiu 梅雨, banko 万古; dojo 泥鰌, futon 蒲団; bekko 鼈甲, Benten 弁天, nandin[1] 南天; Walkman ウォークマン, homestay ホームステイ。

(2) 第2音節に強勢: e.g. butoh 舞踏, catan 刀, goban(g) 碁盤, kogai 笄, Nikkei[2] 日経, O-bon[3] お盆, sensei 先生, tycoon 大君, zazen 坐禅。

3．3音節語

3音節語では強勢の位置は第1音節か第2音節にあり、その出現率は伯仲している。3音節語で第2音節に強勢があるということは、語末から2音節目に強勢が置かれるということである。それはロマンス語や日本語などに付与される英語のアクセントである[4]。

(1) 第1音節に強勢: e.g. akabo 赤帽, fusuma 襖, Ebisu 恵比須, gyokuro 玉露, bonseki 盆石。
(2) 第2音節に強勢: e.g. karate 空手, Hokkaido 北海道, kabuki 歌舞伎, enoki エノキ。

4．4音節以上の語

4音節以上の語となると英語ではかなり息の長い語で、多くは外来の難解語であるが、殆どは派生語か複合語のいずれかである。派生語では主要部（head）に接頭辞（e.g. in-, ex-）や接尾辞（e.g. -ing, -ness)が付加されている。複合語の意味構造は＜修飾語 ＋ 主要部＞である。一般に接頭辞は強勢の位置を変えないが、ロマンス系の語彙の場合、接尾辞によって強勢の位置が移動するものがある（e.g. fámily, famíliar, familiárity)。これを規則化すると、①名詞は語末から2音節目（penult）または3音節目（antepenult）に主強勢がある。②形容詞と動詞は語末音節（ultima）または語末から2音節目に主強勢がある、ということになる。つまり、名詞の強勢は形容詞や動詞の場合と比べて、語末から1音節分遠ざかる。いずれの場合にも、1音節分の揺れがあるのは、語末に近い位置の音節が長ければそこに落ち着くが、その音節が短ければ強勢は語末から1音節分遠ざかるという仕組みである。英語化した日本語もこのようなロマンス系の語彙と同じように強勢が置かれる。元の日本語は「神棚」kamidana（＜kami ＋ tana)，「空手家」karateka（＜karate ＋ ka）など、殆どは2モーラまたは3モーラの主要部を語基として、それに接頭辞や接尾辞、あるいは修飾語といった合成要素が加わる構造を持つ。従って、第1または第2音節に第1または第2強勢がある場合、通常それに後続する合成要素にも強勢が置かれ、例えば4音節語の場合には第3音節、5音節語の場合には第4音節というように、後ろから2番目の音節にも第1または第2強勢があるのが通例である。

(1) 第1音節に主強勢: e.g. kamidana 神棚, matsutake 松茸, katakana, -gana 片仮名, hibakusha 被爆者, Minamoto 源氏, Iwo Jima 硫黄島, Burakumin 部落民, Seiyuhonto 政友本党, Gokuraku 極楽, sogo shosha 総合商社, sosaku hanga 創作版画。

(2) 第2音節に主強勢: e.g. karateka 空手家, Yamato-damashi 大和魂, nigirizushi にぎり寿司, ukiyo-(w)e, -ye 浮世絵, aburabozu 油坊主, Okuninushi 大国主命, manyogana 万葉仮名, tomoe-nage 巴投げ。

(3) 第3音節に主強勢: e.g. ikebana 生け花, teppan-yaki 鉄板焼, hanashika 噺家, hara-kiri 切腹, akamushi 赤虫, Zengakuren 全学連, karaoke カラオケ, sumotori 相撲取り。

(4) 第4音節に主強勢: e.g. kesagatame 袈裟固め, Ogasawara 小笠原, suzuribako 硯箱, uki-gatame 浮き固め, aburagiri 油桐, mitsukurina ミツクリザメ, emakimono 絵巻物, katsuramono 鬘物, uki-otoshi 浮き落とし。

5．音節の増減

英語化した日本語で複数の発音がなされる場合、音節数が増減することがある。次のような場合である。

(1) 連母音が二重母音化すると1音節減少する（e.g. haori［hɑ́:ɔri, hɑ́uri:］羽織, Meiji［mí:idʒi, méi-］明治)。

(2) 強勢のない母音が脱落して1音節減少する（e.g. katsuo［kǽtswou］(cf. katsuwo［kǽtsuwou］) 鰹, momme［mɔ́m(i:)］匁)。

(3) 「きょう、みょう」＜kyo, myo＞ の発音は1音節にしたり、ky-o, my-o と区切って2音節にす

ることができるので、その母音部分は［i(:)ou-］と［(j)ou-］が可能である(e.g. nokyo［nóukjou, -kiːòu］農協, shomio［ʃóumiou, -mjou］小名)。

(4) 「きゅう、りゅう」<kyu, ryu> も同様にして、交替形に［-i(:)uː, -juː］がある(e.g. kyu［kiúː, kjuː］級, senryu［sénriːu, -rjuː］川柳)。

6．強勢移動

英語化すると選択的に強勢を交替する語がある。一般に、語頭と語中で強勢を持つが、この位置の違いはしばしば英音と米音の異同をなす。

(1) 2音節語で第1音節と第2音節で強勢が移動する語：e.g. banzai 万歳, gaijin 外国人, Issei 一世, kaizen 改善, kibei 帰米, mingei 民芸, mondo 問答, Nihon, Nippon 日本, ni(s)sei 二世, sansei 三世, Sendai 仙台(ウイルス), ship(p)o 七宝焼, ume 梅。

(2) 3音節語では、「手裏剣」shuriken［ʃú-, -kén］を例外として、第1音節と第2音節で強勢が移動する：e.g. akebi アケビ, akeki 桧葉, Amida(h) 阿弥陀, awabi 鮑, Awaji 淡路島, bugaku 舞楽, bunraku 文楽, chanoyu 茶の湯, engawa 縁側, gagaku 雅楽, hanami 花見, hechima 糸瓜, hibachi 火鉢, Hirado 平戸, iroha いろは, itzebu 一分（銀・金), jujitsu 柔術, katsura 鬘, kenjutsu 剣術, konnyaku こんにゃく, kotatsu 炬燵, kuruma 車, kwazoku 華族, Kyocera[8] 京セラ, ninjitsu 忍術, orihon 折り本, Osaka 大阪, sashimi 刺身, Satsuma 薩摩, 蜜柑, Shikoku 四国, Shinkansen 新幹線, shubunkin 朱文金, Suntory サントリー, warabi 蕨, wasabi わさび。

(3) 4音節語には2つのパターンがある。①第1音節と第3音節で強勢が移動する語： e.g. arigato 有難う, kurumaya 車屋, makimono 巻物, makizushi 巻寿司, Minamata 水俣, osaekomi 押さえ込み, Takayasu 高安。②第2音節と第3音節で強勢が移動する語： e.g. Hiroshima 広島, Okazaki 岡崎, sayonara さようなら。

Ⅲ．母　音

母音の場合、強勢の有無によって文字に対応する発音をするか、あるいは弱化した母音［ə, i］となるかが決まる。語末では通常第2または第3強勢が与えられ、元の音価を維持する。母音に関して注意すべき点は二つある。一つは、日本語の「あいうえお」[a, i, u, e, o］は閉音節で強勢が置かれると、英語では一般に［æ, i, u, e, ɔ］となることである。もう一つの特徴は、英語化して強勢が置かれる母音は特に開音節で長音化する傾向があるという点である。実際、強勢ある音節では「あ」は［æ, ɑː］,「い」は［i, iː］,「う」は［u, uː］,「え」は［e, ei, iː］,「お」は［ɔ, ɔː, ou］となって出現する。このことはカ行以下の母音についても同様である。

1．ア段の発音

<a, ka, sa..> などの母音字は英語化して <a> と綴られる。それに強勢が置かれると、一般に［æ, ɑː］になる。語によってはその両音が可能であるが、長短の違いは多くの場合、英米の違いでもあり、英音の［ɑː］に対して米音では［æ］が対応する。「か」は通常 <ka> または <ca> で表わされるが、

古音［kw-］を保って＜kw, qu＞で表わされることもある(e.g. Kwannon 観音, kwazoku 華族［kwǽ-, kwɑ́:-］; rikk(w)a 立花, sasanqua 山茶花［-kwə］)。現代英語に［æ］の長音は存在しないので、拗音の「しゃ、ちゃ」＜sha, cha＞は強勢が置かれても短音の［ʃæ, tʃæ］である。「三味線」samisen の語頭音［sæ-］は古音を表わす(cf. shamisen)。ア段の母音は英語化して無強勢であれば通常［ə］となる（e.g. akíta［əkí:tə］秋田犬, shosha［ʃóu ʃə］商社)。以下、強音節における＜a＞の発音を挙げる。当該母音字が同一語に複数ある場合、主強勢の母音字にアクセント記号を付すことにする。

(1)［æ］

ákabo 赤帽, áma 海女, ámado 雨戸, basho 場所, cánna 仮名, dashi だし, hagi 萩, hák(k)ama 袴, kakke 脚気, hancho 班長, kakebuton 掛布団, kánamajiri 仮名まじり, kátakana, -gana 片仮名, kátakiribori 片切彫, katsu 活, katsuobushi 鰹節, katsu(w)o 鰹, kátsura 桂, machi 町, mána 真名, maru ～丸, matsu 松, matsuri 祭, mátsutake 松茸, Nábeshima 鍋島, náp(p)a 菜っ葉, narikin 成金, nunchaku ぬんちゃく, sámurai 侍, Sánda 三田市, sánpaku 三白, Sanron 三論, sáwara 椹, shábu-shábu しゃぶしゃぶ, shaku 笏, 尺, shakudo 赤銅, s(h)amisen 三味線, tachi 太刀, tamo 谷地だも, wácadash 脇差, wáka 和歌, wákame ワカメ, washi 和紙, yámamai 山繭, yashiki 屋敷; Higáshiyama 東山時代の, Kambára 蒲原, Karátsu 唐津, medáka めだか, yukát(t)a 浴衣, zaibátsu 財閥; akamátsu 赤松, Aoyáma 青山, arisáka 有坂, Fujiwára 藤原, Fujiyáma 富士山, kuromatsu 黒松, makiwára 巻藁, Momoyáma 桃山, Suribachi 摺鉢山, togidashi 研出, tai-sabáki 体裁き, waki-záshi 脇差; Ogasawára 小笠原; tsurikomi-ashi 釣り込み脚。

(2)［ɑ:］

háraigoshi 払い腰, mágatama 勾玉, Nára 奈良, raku 楽焼, sabi 寂, tabi 足袋, tákamaki(y)e 高蒔絵, wabi 侘, Yayoi 弥生; Atári Democrat アタリ・デモクラット, kabáne 姓, mikado 帝, nagámi kumquat 長み金柑, sakáki 榊, shimáda 島田, tamári 溜まり, tatámi 畳, t(s)unami 津波, Yamáto 大和, Yukáwa 湯川; Ishihára 石原, Kawasáki 川崎, Nagasáki 長崎, Okináwa 沖縄, omuraji 大連, Shibayáma 芝山, shirakáshi 白樫, tachibána 橘, tanabáta 七夕, teriyaki 照り焼き, Tomonága 朝永, Tsukahára 塚原, Tokugáwa 徳川, uchimáta 内股, ujigami 氏神, uranáge 裏投げ, waza-ári 技あり, Yokohámа 横浜, Yoshiwára 吉原; kesagatáme 袈裟固め, suzuribako 硯箱, uki-gatáme 浮き固め, ude-garámi 腕がらみ, ude-gatáme 腕固め。

(3)［æ, ɑ:］

san ～さん; baren 馬連, báka 馬鹿, habu ハブ, hábuta(y)e, -tai, 羽二重, hániwa 埴輪, kago 駕篭, kágura 神楽, kaki 柿, kami 神, kámidana 神棚, kána 仮名, kánban 看板方式, kanji 漢字, káta 型, mámasan ママさん, ramen ラーメン, sake, -ki 酒, Yagi 八木, Yámaha ヤマハ; Daihátsu ダイハツ, Esaki diode エサキダイオード, Imari 伊万里, karáte 空手, karáteka 空手家, katána 刀, keyaki 欅, Kutani 九谷焼, oyáma お山, rumaki 春巻き, shiatsu, -tzu 指圧; hirakána, -gána 平仮名, ikebána 生け花, kamikáze 神風, origami 折り紙, shakuháchi 尺八, sukiyaki すき焼き, teppanyáki 鉄板焼。

2．イ段の発音

<i, ki, shi..> などの母音字は英語化して通例 <i> で表わされるが、語尾では英語式に綴られた <-y> もある(e.g. skibby, Sony, Suntory)。この母音は強勢が置かれると [i, i:] になる。語によってはその両音が可能である。日本語「し」[ʃi] の古音は [si] であった。それが現代に至って口蓋化し、[ʃi] となった。英語化した日本語で <si> を持つのはその古音を表わしている(e.g. sika 鹿, Sinto 神道)。この母音は語末で開音節に置かれると、弱音節でもしばしば [i:] となるが、それ以外の弱音節では一般に [i] となる。「樒」shikimi [ʃikí:mi] の語頭や「屋敷」yashiki の語中にある [ʃi] の母音は日本語では無声化するので、英語化した異形に母音脱落を示す綴字 skimmi(a), yaski などがある。「敷居」shikii の語末にある連母音は英語化して弱音節に位置し、1音節の長音 [-ki:] になる。しかし、「鳥居」は tórii と綴られると [-ii(:)] を保つが、異形の tóri では [-ri:]、時に [-rai] である。以下の例は強音節の場合である。

(1) [i]

rin 厘; gin(g)ko, -(k)go 銀杏, íchibu 一分, ink(i)yo 隠居, inro 印篭, ippon 一本, míai 見合い, mikan 蜜柑, Mínseito 民政党, Nikko 日光, níngyo-joruri 人形浄瑠璃, ninja 忍者, níshiki 錦, Ritsu 律宗, rikkwa 立花, Rikken 立憲の, Rínzai 臨済, rinnotama 琳の玉, shihan 師範, Shijo 四条派の, shíkii 敷居, Shingon 真言宗, shíntai 神体, Shinto 神道; Fujitsu 富士通, Kakiemon 柿右衛門焼; hanashika 噺家, Mitsubíshi 三菱, yoko-shiho-gatame 横四方固め; aburagíri 油桐。

(2) [i:]

gi (柔道) 着; Bishamon 毘沙門, chíchí チチ, gito, ji- 地頭, hiba ヒバ, Hizen 肥前 (焼), icho イチョウ, I-go 囲碁, íshime 石目, itai(itai) イタイイタイ病, Iwo Jima／Shima 硫黄島, kiku 菊, kikyo 桔梗, ki-mon 鬼門, Minamoto 源氏, Mishima 三島手, Níhongi 日本紀, ríkishi 力士, shí-buichi 四分一, Shiga 志賀 (潔), shíkibuton 敷蒲団, Shíngishu 新義州, shime-waza 締め技, sika 鹿; aikído 合気道, Akita 秋田, Arita 有田, Narita 成田 (空港), Nashíji 梨子地, nigírizushi にぎり寿司, surímí すり身, ukiyo-(y)e, -we 浮世絵; Akihíto 昭仁, Hirohíto 裕仁, Hiroshíge 広重, Kuroshio 黒潮, shibuíchi-doshi 四分一どおし, Takamine 高峰, urushiye 漆絵, tobira[5] 海桐花[とべら]。

(3) [i, i:]

ri 里, Shin 真宗; biwa 琵琶, Biwa 琵琶湖, Bizen 備前, hibakusha 被爆者, hínin 非人, kikumon 菊紋, kíri 桐, kírimon 桐紋, kírin 麒麟, miso 味噌, Nikon[6] ニコン, Nissan 日産, shíitake, -ki 椎茸, shingen tsuba 信玄鍔, Shinshu 真宗, shíshi 獅子, shizoku 士族; Yoshino 吉野。

3．ウ段の発音

<u, ku, su..> などの母音字は通例英語化して <u> で表わされる。それに強勢が置かれると、母音は一般に [u, u:] になる。語によってはその両音が可能である。拗音の「しゅ、じゅ」などは開音節にあって強勢が置かれると長音化して [ʃu:, dʒu:] になったり、短音でしばしば [ʌ] になったりする(e.g. kenjutsu [-dʒʌ-] 剣術, shogun [-gʌn] 将軍, shubunkin [-bʌ́ŋ-] 朱文金)。<u> が語頭または音節の初めに来ると、[(j)u:, (j)u] になることもある(e.g. uta 歌, utai 謡, Ikunolite 生野石,

samurai 侍)。開音節の語末以外では弱化して [u, ə] となる(e.g. aburagiri [-bə-] 油桐, butsudan [-tsə-] 仏壇, kagura [-gu-, -gə-] 神楽)。以下の例は強音節の場合である。

(1) [u]
sun 寸; budo 武道, Búrakumin 部落民, bútsu 仏像, bútsudan 仏壇, fun 分, kúdzu 葛, kumaso 熊襲, kura 蔵, Kúrume 久留米, mura 村, muraji 連, súiboku 水墨画, sukiya 数寄屋風; kuzúshi 崩し, mamushi 蝮, nembútsu 念仏, ofuro お風呂, shibui 渋い, zabuton 座蒲団; akamushi mite 赤虫; tsutsugamúshi 恙虫病。

(2) [u:] (時に[ju:])
gumi グミ, shugo 守護, shuto 手刀, Jurojin 寿老人, sugi 杉, sumi 墨, sumie 墨絵, sumo 相撲, sutemi-waza 捨身技, tsuba 鍔, tsubo 坪, tsuga 栂, tsugi ashi 継足, uchiwa 団扇, ude 腕, udo 独活, udon うどん, uji, 蛆蝿, 氏, uki 浮き, uki-waza 浮き技, uta 歌, utai 謡, yusho 油症, yugen 幽玄, yuzen 友禅染; abúrabozu 油坊主, ad(z)uki 小豆, banzuke 番付, daruma 達磨, Ikunolite 生野石, kabuki 歌舞伎, marúmi kumquat 丸み金柑, Okúninushi 大国主命, Suzúki 鈴木, tsukúri つくり, tsurúgi 剣, tsutsúmu 包む, tsutsútsi ツツジ, tycóon 大君, urúshi 漆, yakuza やくざ; Yamagúchi-gúmi 山口組, Yokozuna 横綱, Zengakuren 全学連; tonari-gumi 隣組。

(3) [u, u:]
bu 分; bushido 武士道, fugi, -ji 藤, 富士桜, 富士絹, fúgu 河豚, Fuji(san) 富士山, furo 風呂, futon 蒲団, mousmee [mú(:)-] 娘, shunga 春画, sushi 寿司, Tsushima 対馬; Kikuchi 菊池, mizuna 水菜, sakura 桜; Kamakura 鎌倉。

4. エ段の発音

<e, ke, se..> などの母音字は英語化して通例 <e> で綴られる。その発音は短音で強勢があると [e, je] となる。[j] は語頭または音節の頭子音として生起する。日本語の「え」[e] は英語の [i] に近いので、時に <i> で綴られ、発音も [i] になる(e.g. ken, kin 間, shiitake, -ki 椎茸)。現代の英語には [e:] は存在しないので、[e] に強勢が置かれて長音化すると、[i:, ei, ai] になる。そのため、語によっては [e, ei], [e, i:], [ei, i:], [i:, ai] のペアのうち、いずれか両音が可能である。日本語が外来語として留まる限り、この母音は開音節の語末では第2または第3強勢が与えられ、一般に [ei] となる(e.g. ishime [í:ʃi:méi] 石目, ude [ú:dei] 腕)。英語に馴化すると [ə, i] という弱化した発音になり(e.g. kuge [-gei, -gə] 公家, sake [-kei, -ki] 酒)、さらには綴字が変化したり(e.g. mompe(i) もんぺ, musumee, mousmee 娘)、その語末母音が脱落したりする(e.g. mokum(e) [-kəm(ei)] 木目, mom(m)e [mɔ́m(i:)] 匁)。以下の例は強音節の場合である。

(1) [e] (時に [je]) : bekko 鼈甲, Bénten 弁天, bento 弁当, métake 女竹, nétsuke 根付, séoi nage 背負い投げ; yen 円, Yeddo 江戸, Yez(z)o 蝦夷; Euroyen ユーロ円。

(2) [i:]: me(e)bos メボス, suiseki 水石。

(3) [ei]: Kegon 華厳, ume [əméi][7] 梅。

(4) 強音節で2様の発音：① [ei, i:] Betamax ベータマックス, eta 穢多[えた]; ② [e, ei] geta 下駄, Seto 瀬戸物; ③ [e, i:] Sega セガ。

5．オ段の発音

＜o, ko, so..＞ などの母音字は英語化して ＜o＞ で表わされる。この母音も多様に発音され、強勢が置かれると [ɔ, ɔ:, ou] となって現出する（III.6.(4) 参照)。長短の両音が可能な場合、[ɔ, ɔ:] か [ɔ, ou] となる。[ɔ:] となるのは主として ＜ori＞ [ɔ́:ri] という音連続の場合である。拗音の「ぎょ、しょ、じょ」などについても同様で、[gjɔ́-, ʃɔ́(:)-, dʒóu-] などとなって現出するが、これらの後母音は特に長音化・二重母音化しやすい。その多様性は主に音節区分によって生じる。例えば、「きょ、りょ」＜kyo, ryo＞ などは ky-o, ry-o として2音節に区分できるので [ki(:)óu-, kjóu-; ri(:)óu-, rjóu-] の3通りの発音が可能である。なお、[ɔ] に対応する米音は [ɑ:] であり、[ou] は現代の RP では [əu] である。＜o, ko, so..＞ は弱音節でも語末の開音節では通例 [ou]([əu]) を保つ(e.g. budo [búdou] 武道, katsuwo [-wou] 鰹)。それ以外で弱化すると [ə] になる(e.g. Canon [kǽnən] キャノン, soroban [-rə-] 算盤)。以下の例は強音節の場合である。

(1) [ɔ]
on 恩, to 斗; gyókuro 玉露, hokku 発句, nórimon 乗物, noshi 熨斗, omnagata, onna- 女形, onsen 温泉, shodan 初段, sóroban 算盤; tai-otóshi 体落とし, uki-goshi 浮き腰; uki-otóshi 浮き落とし; tsurikomi-góshi 釣り込み腰。

(2) [ɔ:]
tori（柔道の）取り; Midori （商標名）ミドリ, nigori 濁, randori 乱取り, satori 悟り; amanori 甘海苔, sumotóri 相撲取り, yakitori 焼き鳥。

(3) [ou]
go(h), Go(h) 碁; Bonin Islands 無人[ぶにん]島, dójo 泥鰌, góbo ごぼう, Gokuraku 極楽, hoju 補充兵役, Hokusai 北斎, Hotei 布袋, koban(g), co- 小判, Kojiki 古事記, kojiri 鐺, kokeshi こけし, koku 石, kózo 楮, kokumin 国民兵役, mokum(e) 木目, Mómoyama 桃山, nórito 祝詞, obi 帯, ojime 緒締, omi 臣, ryokan 旅館, soba 蕎麦, sódoku 鼠咬症, Sony ソニー, Tosa 土佐, yobi 予備役; funori 布海苔, Genroku 元禄, kimóno 着物, odóri 踊り, shimose 下瀬, tomóe-nage 巴投げ; Hashimóto 橋本, hatamóto 旗本, kakemóno 掛物, kanamóno 金物, karaoke カラオケ, Mikimóto 御木本, okimóno 置物, sewamóno 世話物, shosagóto 所作事, suimóno 吸物, Sumitómo 住友, surimóno 刷りもの, terakoya 寺小屋, tokonóma 床の間, tsurikomi 釣り込み, yuzen-zome 友禅染; emakimóno 絵巻物, katsuramóno 鬘物。

(4) 強音節で2様の発音：① [ɔ, ɔ:] nori 海苔, óshibori おしぼり, torii 鳥居; ② [ɔ, ou] enoki エノキ, Fuku-roku-ju 福禄寿, hinoki 桧, mochi 餅; ③ [ou, ɔ:] chórogi 草石蚕, jóro 女郎。

6．日本語の連母音 ＞ 英語の二重母音・長母音

(1) 日本語の ＜ai, kai, sai..＞ は英語化すると強勢の有無に関わらず、母音は一般に [ai] となる(e.g. áikuchi 匕首, dáiri 内裏, jigotái 自護体, máiko 舞妓; Téndai 天台宗, útai 謡)。ただし、「アイヌ(語)」Ainu には [áinu:] の他に [éinu:] もある。また、「懐剣」は比較的新しく英語化した語であるが、k(w)aiken と綴られ、[k(w)áiken] と発音される。[kwai-] は古音を表わす。「見合い」míai の場合、母音接続を生じるので、弱化して [míəi] となる。

(2) 日本語の ＜ei, kei, sei..＞ は英語化すると強勢の有無に関わらず、母音は一般に [ei] となる(e.g. géisha 芸者, Nikkéi 日経, senséi 先生; Kémpeitai 憲兵隊, Mínseito 民政党)。ただし、英語の綴字 ＜ei＞ は普通 [i:] と発音されるので綴字発音により [i:] になることもある (e.g. heimin [hí:min, héi-] 平民, Meiji [mí:idʒi, méi-] 明治)。

(3) 日本語の ＜oi, koi, soi..＞ は英語化すると強勢の有無に関わらず、母音は [ɔi] となる(e.g. aói tsuba 葵鍔, kói-cha 濃い茶, óiran 花魁; Yáyoi 弥生, séoi nage 背負い投げ)。なお、二重母音ではなく、母音が連続する場合に子音が挿入されることもある(e.g. shogoin [ʃóugə(w)in] 聖護院)。

(4) 日本語で長音の ＜ou, oo, kou, koo..＞ などは英語化すると、一様に母音字は単綴字の ＜o＞ で表わされ、それに強勢が置かれると、一般に [ou] と発音される(e.g. butóh 前衛舞踏, Kyócera[8] 京セラ, rómaji ローマ字, shógaol ショウガオール, shóyu[9] 醤油, tófu 豆腐)。一部は [ɔ:] になる(e.g. Kórin 光琳, manyógana 万葉仮名)。時に [ɔ(:)] もある (e.g. bonze 坊主, zóri 草履)。また、語によっては [ou, ɔ:] の両音が可能である (e.g. dótaku 銅鐸, nakó(h)do 仲人, sho 升, 笙)。日本語「しょう」[shou] の古音は [sou] だった。従って、「醤油」の英語は soy, soya, shoyu など様々に綴られるが、shoyu は新しく、soy, soya の方が早い時期に英語に採用され、古い発音を留めている。「掃除」は英語化して意味も発音も変化し、soogee, -gie「甲板を洗う（ロープヤーン)」となり、強勢母音は [u:] になった。この発音は日本語の長音を表わす ＜oo＞ に対する綴字発音である。

(5) 日本語の [ʃu:, dʒu:; kju:, rju:] などは英語化すると、一般に ＜shu, ju; kyu, ryu＞ と綴られ、強勢があれば母音は共通して [u:] になるが、＜kyu, ryu＞ の場合には [kiú:, kjú:], [riú:, rjú:] の 2 通りの発音がなされる(e.g. judo 柔道, Kyúshu 九州, Ryúkyu 琉球, Shuha 宗派)。

(6) 「あお」[ao]という音連続は英語に存在しないので、英語化すると [au, ɑ:, ɔ:, ou] のいずれかになる(e.g. Aoyama [aujǽmə, əou-] 青山, aucuba [ɔ́:kjubə, óukiu:-] 青木葉, haori [Br. hɑ́:ɔri, Am. háuri:] 羽織)。

Ⅳ．子　音

1．促　音

英語と比較すると、日本語には英語のような弱音節は本来存在しないので母音の脱落は起こりにくい。また、子音連続は特殊音節（撥音、促音）を除けば容認されないので、子音自体も変化しにくく、子音脱落も起こりにくい。しかし、子音の変化や脱落が生じないわけではない。促音は歴史的には母音脱落など

の音変化の結果生じた子音連続であり、特に無声の破裂音の前で生じるのを特徴とする。例えば「特金」tokukin や「一本」itipon の [-ku-], [-ti-]([tʃi]) の母音が脱落して tokkin, ippon となり、その綴字が英語でも用いられる。ここで注意したいのは、日本語の促音は [-kk-, -pp-] のように同じ子音が連続するが、英語では同一の子音が連続することはないということである。英語の重字は同じ子音の連続を意味するのではなく、原則として先行する母音が強勢のある短母音であるということを示す。従って、日本語の促音は英語化すると次のようにして現出する。

(1) 一般に重字の前の母音は強勢ある短母音になる(e.g. bekko 鼈甲, happi [hǽpi(:)] 法被, hokku [Br. hɔ́ku:, Am. há-] 発句, ippon [ípɔn] (柔道の) 一本, Nikko 日光, Risshu [ríʃu:] 律宗)。
(2) 促音便は必ずしも英語化して重字にならず、単綴字で綴られることもある(e.g. nap(p)a 菜っ葉, Nip(p)on 日本, ship(p)o 七宝焼)。
(3) 重字の前の母音は必ずしも強勢ある短母音ではない(e.g. Hokkaido [Br. hɔkáidou, Am. hou-] 北海道, Nissan [Br. nísæn, Am. ní:sɑ:n] 日産)。
(4) 主強勢が重字の前でなく、後続音に生じることがある(e.g. Nikkei [ni(:)kéi] 日経, seppuku [sepú:ku(:)] 切腹)。これら新旧の語は英語の慣用に従わず、日本語の低高というアクセントを保っている(i.e. Jap. [ni˥kkei], [se˥ppuku])。
(5) 本来促音を持たない語に重字が使用されることがある(e.g. hak(k)ama [hǽkəmə] 袴, kotto [Br. kɔ́tou, Am. ká:-] 琴[10], Yeddo [jédou] 江戸, Yez(z)o [jézou] 蝦夷)。これらの重字は先行する母音が強勢ある母音(通例短音、時に長音)であることを表わす。
(6)「二世」は日本語で [ni˥sei] であり、本来促音を持たないが、英語化して nis(s)ei [ní(:)sei, ni:séi] となるのは関連語「一世」issei [í:sei, i:séi] の類推による。

2. 撥　音

「ん」/n/ を尾子音とする音節は英語では閉音節になり、そこでは母音は短くなる傾向がある。ただし、[n] が音節の頭子音である場合にはその限りでない(e.g. chanoyu [tʃǽnouju:, -nóu-] 茶の湯, funori [funóuri:] 布海苔, ronin [róunin] 浪人)。音素 /n/ は後続音を伴って、それに逆行的な同化をするので英語でも [m, n, ŋ] として生起する。これらの異音は次のような分布をなす。

(1) 後続音が [p, b, m] のような両唇閉鎖音である場合には [n] > [m] となる(e.g. Kempeitai 憲兵隊, kombu 昆布, momme 匁)。ただし、本来の <n> [n] を保つ場合もある(e.g. sanpaku [sǽnpəku] 三白, tenpo, tem- [ténpou, tém-] 天保銭, tenmoku, tem- [ténmouku:, témou-] 天目茶碗)。
(2) 後続音が軟口蓋の [k, g] である場合には [n] > [ŋ] となる。この場合、綴字は変化しない(e.g. janken じゃんけん, shubunkin 朱文金 [-ŋk-]; engawa 縁側, tengu 天狗 [-ŋg-])。
(3) 撥音の連続 <nn> が綴字のみならず発音でも英語で保たれることがある(e.g. rinnotam(a) [rín.noutǽmə] 琳の玉, sennin [sén.nin] 仙人)。ただし、英語では同一子音の連続は認められないので、それらの語が [-nn-] と発音されるのは極めて不自然であり、英語に十分馴染んでいない証拠である。英語化すれば、<nn> は単音 [n] を示すのが原則である (e.g. konnyaku [kɔnjǽku] こんにゃく, Kwannon [kwǽnɔn] 観音, onnagata [ɔ́nəgǽtə] 女形, tenno [ténou] 天皇)。
(4) 語尾または音節の末尾で、日本語の「ん」はしばしば <ng> と綴られ、[ŋ] と発音される (e.g. futon(g) 布団, goban(g) 碁盤, oban(g) 大判)。

3．その他の子音

古い時代に英語化した日本語はしばしば古音を保っている。カ行には［kw-］があった。サ行の＜shi＞が特異であるのは、日本語で「し」［si］の摩擦音［s］が［i］に影響されて口蓋化し、歯茎音の［ʃ］に変化したためである。「小名」siomio, shomio,「醤油」soy, shoyu などの異形の発音と綴りはそのような新旧の発音を反映している。「山茶花」sasanqua［səsǽŋkwə］における第2音節の初頭音［s-］は前後の有声音に同化して後に濁音となった。英語の有声化は「片山貝」Katayama［kətəjǽmə, kædə-］,「小藤石」kotoite［kóutouàit, kóudəwit］,「鶯」uguisu［ugwí:su, -zu］などに交替形として生じている。

「じ」［ʒi］と「ぢ」［dʒi］、「ず」［zɯ］と「づ」［dzɯ］は日本語でもしばしば混同される。日本語の［dʒ］は有声歯茎硬口蓋摩擦音で、［s］＞［ʃ］の変化と同様に、［z］が［i］の影響で口蓋化して［ʒ］になり、その変化に伴って［dz］から［dʒ］となったものである。／dz／と／z／の違いは、例えば「小豆」adzuki［ædzú:ki］の異形に aduki［ædú:ki］があり、「杏」は ansu［ænsu(:), -zu(:)］と発音されることから理解されよう。英語の Godzilla［Br. gɔdzílə, Am. gɑ:dzílə］は綴字も発音も「くじら」本来の発音である「ぢ」／dzi／を忠実に表わしている。しかし、日本でも最近では／dz／と／z／を混同して、特に語頭以外で［dz］（［dʒ］）を［z, ʒ］と言うようになった(e.g.［a˩zuki˥］)。そのような慣用は英語化した日本語にも時に反映されている(e.g. Azuchi［ǽzu:tʃi:］安土)。

タ行では「ち」と「つ」が注目される。無声硬口蓋破擦音「ち」［tʃi］は英語化して＜chi＞［tʃi(:)］となり、無声歯茎破擦音「つ」は英語化して＜tsu＞［tsu(:)］となる。しかし、［ts］は英語では少し特殊で、一般に1音でなく連続する2音として、破裂音［t］に摩擦音［s］が後続したものと考える。少し特殊というのは、この連続は純然たる英語においては語頭に生じないからであり、例えば「津波」tsunami［tsunɑ́:mi］の異形に tunami［tunɑ́:mi］があるように、しばしば［tu-］あるいは非標準的発音では［su-］に置き換えられる。英語では［ts］を語頭で発音するのは容易でないので、その連続音の一方を選択し、他方を脱落させるのである。［tsu］の［u］は英語で強勢がなければ弱化して［tsə］となったり(e.g. tsutsugamushi［-tsə-］恙虫病)、あるいは消滅したりする(e.g. netsuke［néts(u)ki］根付)。

ハ行音は昔［p］で発音されていた。それが摩擦音化し、［p］＞［f］＞［h］を経て現代音に至っている。古い時代に英語に採用された日本語には「桧」hinoki, finoki,「いろは」iroha, irofa[11] のように［h］と［f］の交替形を持つ語がある。最近では一般に無声硬口蓋摩擦音「ひ」＜hi＞［çi］は英語化すると通常＜hi＞［hi］になる。［ç］は音素／h／が［i］の前で口蓋化した結果生じた摩擦音である。また、無声両唇摩擦音の「ふ」［Fu］は英語には存在しないので、英語化すると＜fu＞［fu(:)］になる(e.g. Fuji(san), Fujiyama 富士山, furo 風呂)。ラ行は1例（i.e. larmen; cf. ramen ラーメン）を除いて、英語化すると＜r＞［r］となる。これも［ç］＞［h］,［F］＞［f］と同様に、類似音への置換（［R］＞［r］）である。

*　　*　　*

『海のかなたの日本語』のはしがきで伊藤先生は、「英語辞書中の日本語によって日本文化を再考し、私たちの日本文化にさらに誇りを持って下さるよすがともなれば望外の仕合わせである」と述べておられる。これを契機として、筆者は英語に採用された日本語には、正に私たちが忘れかけている日本の言語文化が如実に反映されていることを思い知った。かつて大切にしていた言葉やモノや伝統までもが使い捨て文化の中で失われようとしている昨今、むしろ英米の英語辞典が戦前から日本語を多く収録し、戦後はいっ

そう積極的に古語も含めて採用しようとしていることは皮肉なことと言わねばならない。本稿はその発音の概略を述べた。細部については稿を改め、再考したいと思う。

注

1）「南天竺」の略称。これは語尾に -a を伴うか否かによって音節数も発音も異なる。nan-din だと 2 音節で強勢は語頭にあり、語尾は閉音節なので［nǽndin, -dən］となる。nan-di-na だと語中に強勢が置かれ、しかも -di- は開音節で長くなり、[-dáinə, -dí:nə] と発音される。

2）語中の重字 -kk- は［ni-］を意味するのではなく、［k］の前の促音「っ」を表わす綴字法であるが、英語では単音［k］を意味するのみで、促音は実現されない（IV.1.(4) 参照)。

3）接頭辞の「お」は音節数に関わりなく、原則として英語でも強勢がない(e.g. obento お弁当, ofuro お風呂, oyama お山、女形)。

4）「自護体」jigotai は日本語では 4 モーラで、本来語末から 2 音節目に強勢が置かれる筈であるが、その語末は英語化して二重母音になるので第 3 音節に強勢が置かれる。

5）「扉」に由来する。英語では［bi］に強勢が置かれ、長音化した。

6）米音では［ní:kɑ:n］の他に［náikɑ:n］もある。

7）［ú:mei］とも発音される。異形に mume があり、その場合［múmi:］などと発音される。

8）Kyocera の第 1 音節は［kjóu-］の他に［kái-］とも発音される。後者の場合、ky-o と音節区分され、その第 1 音節が［ki:］から［kai］に発達した。

9）shoyu の音節区分は sho-yu と shoy-u が可能であるので、[ʃóuju(:), ʃói-] の 2 通りに発音される。古形の soeyu も［sóuju(:), sói-］と発音される。

10）異形に koto［kóutou］がある。この綴字だと ko-to と音節区分され、いずれも開音節に置かれるので、母音は長くなる。

11）他にも異形として irofa の［f］が有声化したことを示す irova もある。